

新年度を迎えて

看護部長 辻村 淑子

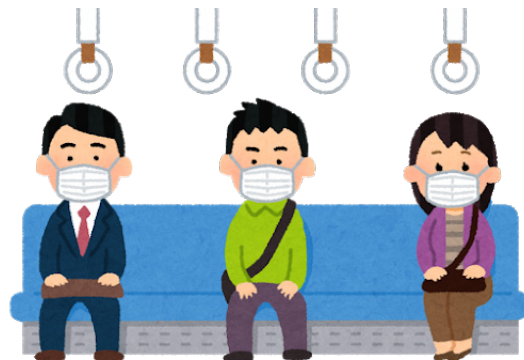


昨年度は、新型コロナウイルス感染症の対応に苦慮し、医療崩壊が叫ばれる危機的状況が続きましたが、新しい年になり、やっと検査体制が整い、徐々にワクチン接種に移行できる状態になってきています。

手洗い・ユニバーサマスク・密を避けることが、何より重要な感染防止対策ですが、新型コロナウイルス感染症蔓延の終息が見えない不安があり、意思疎通のため必要な食事会やリフレッシュ休暇等が制限され息苦しい年度でした。

このウイルス感染症は世界中の人の生活を変え、経済を停滞させました。IMF（国際通貨基金）の経済顧問兼調査局長ギータ・ゴピナート氏は、新型コロナウイルスによる現状を「各国が感染拡大防止に必要な隔離や社会的距離確保の対策を実施する中、世界は「大封鎖」と呼べる状況に置かれているとし、この大封鎖が終わったときに経済の様相がどのように変わっているか、相当な不透明感があるとしています。

社会全体がふつうではありません。不安やストレスでイライラしています。日本赤十字社が昨年、新型コロナウイルス感染症に対応する職員のための「サポートガイド」を発表しました。この中で、感染症対応に従事する人や家族が「3つの直接・間接的な感染症リスク」にさらされることにより「こころの健康を損なうおそれがある」と触れています。



第一のリスクとは、「**生物学的感染症**」で疾病そのものです。

第二の感染症リスクとは、「**心理的感染症**」といわれる、

見えないこと、治療法が確立されていないことで生まれる強い不安や恐れです。

第三の感染症リスクとは、「**社会的感染症**」

不安や恐怖が生み出す、他人に対する嫌悪・差別・偏見です。



医療従事者に対する誹謗中傷や暴言は、ここの「心理的感染」に基づく「社会的感染」です。病院でも医療従事者の子供は保育園になるべく通園させないでほしいと拒否された時期がありました。しかし、私たちは、使命を全うしていくため、歩みを止めるわけにはいかないのです。

外来以外の部署も対応の変化がみられます。3密を避けるため研修体制も見直され、Zoom研修に変わりました。地域カンファレンスもオンラインで実施されるようになり、画面を見ながらの意見交換です。face to faceのやり取りと違い、じっくり一人一人の意見と向き合うことができにくい、という点において課題があり、スムーズな運営はこれからだと思っています。誰しも、さまざまな事態が回復し、通常の生活に戻りたいと願っています。ただ、それには、少し時間がかかるとしています。

さて、今年度はこのような状況で、一年延長された病院機能評価受審があります。これまで一貫して取り組んできた地域に根差し、患者に寄り添いサポートする病院であるかが評価されます。私たちにできることを精一杯行い、変化を理解し、それに適切に対応していくため、襟を正して向き合っていきたいと思います。

